小学部高学年の読解授業における教師の効果的な発問に関する研究

～小学部５年の説明文読解授業の追試を通して～

佐坂　佳晃

小学部の高学年になると、国語で取り上げられる教材文は、文章量が増えるとともに難しい語句が多く使用され、内容もより抽象的になる。授業者には、教材文を正しく理解させるための指導技術が求められる。筆者は自身の指導技術を高めるため、説明文の読解授業の追試を試みた。本稿では読解の指導技術の中でも特に発問を取り上げ、追試と追試の対象として選んだ授業とを比較検討することによって、読解授業における教師の効果的な発問について考察した。

【キーワード】　読解授業　指導技術　追試　原実践　効果的な発問

１．はじめに

「追試」とは「よい授業例」を学習指導案そのままに授業してみて、所期の効果を確認するという意である（市毛、2011）。

追試を通して授業の効果を確認するということは、発問・指示・授業の組み立て等を学ぶよい機会となり、指導技術の向上につながると考えられる。

またよい授業例（原実践）の指導案には、対象児が異なっても児童の理解を促すことのできる効果的指導方法を見出せるかも知れない。

本稿では指導方法の中でも特に発問に焦点を当て、原実践と追試とを比較検討することで明らかになったことを報告したい。

２．方法

（１）追試の概要

①原実践

平成21年度の関東地区聾教育実践研修会（主管：筑波校）において本校小学部のＡ教諭が行った指定授業と事前授業（学級：小学部５年、教科：国語、単元名：動物の体（東京書籍５年上）を原実践とした。

②追試

平成23年度の関東地区聾教育実践研修会（主管：筑波校）において筆者が行った指定授業と事前授業（学級：小学部５年、教科：国語、単元名：動物の体と気候（東京書籍５年上））を追試とした。

（２）対象学級

原実践学級は男子３名、女子２名、計５名。

追試学級は男子１名、女子３名、計４名。

教研式読書力診断検査の結果（**表１**）から、両学級ともほぼ全員が学年相応の読書力を有しているものと思われる。従って両学級とも学年対応の国語の単元を扱えるものと考えられる。

表１　教研式読書力診断検査の結果（偏差値）

原実践学級	A	B	C	D	E
	62	41	51	65	59
追試学級	F	G	H	I	
	66	50	62	58	

（３）授業の比較検討

原実践と追試の事前・指定の各授業を撮影したＶＴＲを基に、授業記録を作成した。授業記録や発問を示した指導案（深江、2008）に沿って原実践と追試の各授業を丹念に見比べることによって、相違点とその原因を中心にして検討を行った。

３．結果と考察

（１）事前授業

資料１　本文

①地球上には、暑くてかわいた砂ばく地帯もあれば、逆に、冬にはマイナス数十度にまで下がり、雪と氷にとざされてしまう所もある。そのような所にも、いろいろな動物たちが、それぞれの環境に適応しながら生きている。

①原実践では「暑くてかわいた砂ばく地帯」について、「みんなは住んでみたい？」と発問している。

一方追試でも「こういう暑くてかわいた砂ばく地帯に、もし今君たちが行ったとしたらどうですか。」と発問している。

どちらの発問も「暑くてかわいた砂ばく地帯」がきびしい環境であることを読み取らせることをねらっている。

表２と**表３**は、それぞれの発問に対する児童の発言の授業記録である。

表２　原実践の授業記録

教師の発問	児童の反応	
（サハラ砂漠について）みんなはどう？住んでみたいですか？どうしてたおれてしまう？	E	僕はサハラ砂漠に行ったらたおれてしまうと思うので、住んでみたくありません。
	E	暑いから。
	D	暑いし、水も少ないので無理。
	E	住みたくない。
	C	サハラ砂漠には、危険な虫とかがいると聞いたことがあるから住みたくありません。

表３　追試の授業記録

教師の発問	児童の反応	
こういう暑くてかわいた砂漠地帯に、もし今君たちが行ったとしたらどうですか。	G	暑い。
暑い。暑いだけ。	I	苦しい。
苦しい。	H	熱中症になる。
	G	暑くて死にそうになる。

原実践の発問によって児童は、その場所がどんな所かについて「水も少ない」「危険な虫」などあたかも児童は砂漠にいるかのごとく具体的に想像している。５名中３名が「住みたくない」という主旨の発言をしている。

追試では、児童からは「暑い。」「苦しい。」「熱中症になる。」と正しい内容の発言は出ているものの原実践と比較するとやや実感に欠ける。

追試では「暑くてかわいた砂ばく地帯」と、「雪と氷にとざされてしまう所」とが、きびしい環境であることに気付いた児童はいなかった。

その原因の１つとして考えられることは、「みんなは住んでみたい？」という発問の効果である。つまりこの発問により児童が「住めそうにない所である。」と具体的にイメージできたことが、「厳しい環境である」ことを気付かせたのではないかということである。

②追試では、「暑くてかわいた砂ばく地帯」と「雪と氷にとざされてしまう所」とが、「逆の関係」になっていることを児童が発言することができず、授業の流れが悪くなってしまった。つまり児童は「逆の関係」として捉えることができなかったのである。その原因の１つとして考えられるのは、「地球上には、どんな所があると書いてあるの。」という発問に対して、ある児童の「暑くてかわいた砂ばく地帯もあれば、逆に、冬にはマイナス数十度まで下がり、雪と氷にとざされてしまう所。」という教科書の本文を抜き出した発言を、授業者が認めてしまったことである。

本来は「暑くてかわいた所と寒い所」のように簡

潔にまとめることで、「暑い」と「寒い」の「逆の関係」を捉えやすくしたかった。なので追試では、「もう少し短く言うと。」と指示している。

しかしある児童の発言に対して、他の児童たちの反応（表情）が良いということで授業者もそれで良しとしてしまった。そこに詰めの甘さがあったように思う。

一方原実践では、「長いけれども、どんな所とどんな所があると書いてあるか分かる。」という形で発問している。それに対してある児童は、「暑い所と寒い所です。」と簡潔にまとめた答え方ができた。

教科書本文には「～な所」という形では書かれていない。よって「どんな所とどんな所があると書いてあるか」という発問に対しては、児童は考えて発言する必要がある。おそらく児童は長い本文を簡潔にまとめた答え方をしようという意識が働いたのだと思われる。

また授業者はこの発問によって、児童の読解力や分かったことをまとめる力について評価することができる。これらのことはこの発問が持つ効果だと言えよう。

読み取りの最初の発問で児童に「地球上には、暑い所と寒い所がある。」と簡潔に理解させたことが、後の展開の２つの場所が「逆の関係」になっていることや、「逆の関係」だけれども２つとも人は住めそうにない、つまり「厳しい環境」であることに導いていく布石になっているのではないかと考える。

（２）指定授業

資料１　本文

⑦また、寒い地方にすむ動物は、同じ種類の中では、あたたかい地方にすむものにくらべて体格が大きいといわれている。
⑧ニホンシカを例にとってみると、北海道のエゾシカ、本州のホンシュウシカ、四国、九州のキュウシュウシカ、屋久島のヤクシカと、北から南にいくにつれて体格が小さくなっていく。
⑨体温を一定にたもっていくための熱の生産は、筋肉の活動によって行われる。体が大きく、筋肉が発達していればいるほど、熱量の生産が多くなる。体が大きいのは、熱量の必要な寒地の生活に適しているわけである。

①原実践、追試とも形式段落に書かれている内容を「寒い地方にすむ動物の方があたたかい地方にすむ動物に比べて体格が大きい」とまとめさせている。次に前の時間は「寒い地方にすむ動物のホッキョクギツネと、あたたかい地方にすむ動物のキリン」について学習したことを想起させる。そこで授業者は「おかしいね」と発問している。

これは授業者はなぜ「おかしい」と言ったのかを考えさせることで、形式段落に書かれている内容が、前の時間に学習したことと矛盾していることに気付かせるのが第１のねらいである。

しかし本当は矛盾をしているのではなく、「同じ種類の中では」という条件があることを本文から読み取らせることを最終的にねらっている。

原実践、追試とも多少の反応の違いはあったが、ねらいを達成することができた。

この発問は、児童が常識だと思っていることを否定することで、理解を深めたり、新たな知識や考え方を身に付けさせることをねらっている。ただし児童が持っている知識や言葉で反論ができることが条件となる。

②原実践では、簡潔にまとめて答えるように指示している。動物の体格と気候の関係について、本文で

は何と書かれているかを考えさせた際、ある児童は形式段落全て「寒い地方にすむ動物は、同じ種類の中では、あたたかい地方にすむ動物にくらべて体格が大きいといわれている。」を読み、答えとした。しかし授業者は「長すぎます。」と再度簡潔にまとめて答えるように指示した。このことは「長いけれども、どんな所とどんな所があると書いてあるか分かる？」という発問の所で述べたことと共通している。

追試でも「３段落にはどんなことを書いてありましたか。」という発問に対して、ある児童が形式段落全てを答えたので、授業者は「まとめて言って。」と指示している。このことは筆者が事前授業の追試を通じて学んだことの１つである。

③「（寒い地方にすむ動物について）体格が大きいと何か良いことがありますか。」という発問に対する反応として、指導案では次の３つを考えた。

ａ筋肉が発達している。…誤反応

ｂ熱量の生産が多くなる。…正反応

ｃ寒い地方にすむのに適している。…正反応

ａが出た場合は、「筋肉が発達していると何か良いことがあるか」と尋ね、熱量の生産が多くなることを引き出す。

ｂが出た場合は、「体格が大きいとどうして熱量の生産が多くなるのか」と尋ね、筋肉が発達していることを引き出す。

ｃが出た場合は、「どうして適しているのか」と尋ね、熱量の生産が多くなることや、筋肉が発達していることを引き出す。

つまりいずれの反応が出ても、それぞれは関連しているということが本文から読み取れるよう発問を組み立てた。これは原実践の指導案に改良を加えたものである。

４．おわりに

指定授業の追試については、ほぼ指導案通りの授業を展開することができた。児童が違っても指導案通りの授業を再現することができたということは、それは取りも直さず指導案に示されている指導方法が効果的であることを証明している。

一般校で「追試授業」が授業研究法として認められるようになって30年ほどが経つ。優れた授業から学ぶべきことは、聾教育においても同じである。今後も実践を通じて、児童の理解を促すことのできる効果的指導方法を追求していきたい。

【文献】

市毛勝雄：なぜ「追試」が必要か．現代教育科学、659、8-10、2011

深江健司：授業研究に役立つ指導案の検討―授業デザインと授業イメージの観点から―．聴覚障害、691、26-35、2008

参考１　追試（指定授業）の学習指導案

１　単元名　　動物の体と気候（東京書籍５年上）
２　単元目標　表現に注意しながら、書かれていることを正しく読み取る。
３　指導計画（18時間扱い）
（１）全文を読み、あらましをつかむ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間
（２）初発の感想を書き、感じたことを話し合い、学習の見通しを持つ。・・・２時間
（３）新出漢字や語句の学習をする。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間
（４）意味段落に分ける。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間
（５）形式段落ごとに書かれていることを正しく読み取る。・・・９時間（本時６／９）
（６）学習のまとめをする。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間
４　授業の主旨
本学級は男子２名、女子４名からなる。うち女子１名については国語科の学習は、個別指導が自立活動担当により行われている。よって国語科の授業は通常５名による一斉指導である。
５名のうち３名は聴力や発音の明瞭さに違いはあるものの、相手の話や学習内容を概ね理解することができる。他の２名は聴覚をよく活用し、日常会話はある程度スムーズに行えるが、語彙や文法の力がやや弱いため授業者の発問の意図がつかめないことがある。
語彙や文法、知識の定着と拡充を図るための手だてとしては、授業はもとより朝の会や昼休みの雑談等で話題になったことなどを問題形式にしたプリントを宿題にしている。また授業者の方で拾い出した難語句やそれ以外にも意味が分からないと思った語句を調べさせ、全体での語句の学習で理解を深めるようにしている。保護者にも協力を仰ぎ、授業で扱った語句や表現などは、できるだけ実生活や日記で使うようにさせている。
国語科の読み取りの授業に関しては、話題に沿って考えやすくするための発問の工夫の他、児童の思考を促すような話題や情報を提示したり、児童が考えた理由や根拠を問う発問を行ったりすることを心がけている。
本教材は、動物の体の特徴が、環境に適応したものになっていることを読み取る教材であるが、その他の様々な知識が必要であろうと思われる。そこで児童には、事前に本教材の読み取りに必要な知識（例えば、日本列島の気候など）を獲得させたり、読み取りの際に情報を提供したりしたいと考える。またそれらをもとに正しく読み取り、理解させるための発問を工夫したい。
本時では、ニホンシカの体格が、気候によって異なることを理解することが求められる。そこでは、発問の工夫により、文章表現に注意させたり、既に学習した事柄（知識）や教科書の図をもとに考えさせたりしながら、寒い地方にすむ動物の方が体格が大きいという事実を読み取らせていきたい。そしてそれらをもとに、気候によって動物の体格が異なる理由を読み取らせたいと考える。
５　本時の目標
ニホンシカの例をもとに、気候によって動物の体格が異なるという事実とその理由を読み取る。
６　準備
前時までの学習をまとめた掲示物と短冊黒板①②、めあてを書いた短冊、本文を拡大した紙、ニホンシカの名前を書いたカード、日本地図、ニホンシカの体格の図を拡大した紙

7　展開

学習事項・発問	予想される反応	配慮事項・手立て
1　前時までの復習をする。 「２段落には、どんなことが書いてあったか。」 「動物の体形と気候にはどんな関係があるか。」	○動物の体形と気候との関係 ○寒い地方にすむ動物のほうが体がまるっこく、出っ張り部分が少ない。	・前時までの学習をまとめた掲示物や短冊黒板①を使って想起させる。
2　本時の学習範囲とめあてを知る。 （形式段落⑦～⑨） 「３段落には、何が書いてあるか。」	○動物の体格と気候との関係	・短冊黒板②を示し、確認させる。 ・「体格」とは「体の大きさ」であることを押さえておく。
3　学習範囲を読む。		・動物の体格と気候にどんな関係があるのか、考えながら読むように指示し、 一人一文ずつ指名読みさせる。
4　読み取ったことをもとに話し合う。 「動物の体格と気候にはどんな関係があるか。」	○同じ種類の中では、寒い地方にすむ動物のほうが体格は大きい。	・短冊黒板②の裏に板書し、これからの展開に利用できるようにする。
「この前学習した寒い地方にすむ動物は何だったか。」	○ホッキョクギツネ	・思い出せない児童については、前時までの学習をまとめた掲示物で確認するように指示する。 ・きのう学習した動物であることを再度押さえ、気付かせる。
「きのう学習したあたたかい地方にすむ動物は何だったか。」	△フェネック。 ○ゾウ。 ○キリン。	
「ホッキョクギツネとキリンではどちらが大きいか。」	○キリン。	
「おかしいね。書かれていることと違うね。」	○同じ種類でくらべていないから。	・「同じ種類の中では」という表現が、分かっているかどうか確認する。
「筆者（増井さん）は同じ種類で比べているか。」	○比べている。	
「それは何か。」	○ニホンシカ ○エゾシカ、ホンシュウシカ、	・これらは同じ種類であること、ニ

	キュウシュウシカ、ヤクシカ。	ホンシカの仲間であることを押さえる。
「エゾシカ、ホンシュウシカ、キュウシュウシカ、ヤクシカは、それぞれどこにすんでいるか。」	○エゾシカは北海道、ホンシュウシカは本州、キュウシュウシカは四国、九州、ヤクシカは屋久島。	・すんでいる所を確認した後、シカの名前を書いたカードと体格の図を日本地図に貼らせる。
「体格はどうなっているか。」	○小さくなっている。	
「どこに書いてあるか。」	○北から南にいくにつれて体格が小さくなっていく。	・書かれているところを、児童になぞらせる。
「北はどこか。」	○北海道。	
「南はどこか。」	○屋久島。	
「では南から北へいくにつれて体格はどうなっているか。」	○大きくなっている。	・板書し、まとめるようにする。
「寒い地方にすむ動物のほうが体格が大きいことに合っているか。」	○合っている。	・短冊黒板②を示し、判断させる。
「どうして合っていると言えるか。」	△北のほうにすむ動物は、体格が大きいから。 ○北のほうは寒いから同じ種類の中では、寒い地方にすむ動物のほうが体格が大きいことに合っている。	・「北のほうは寒い」や「北へいくにつれて寒くなる」ということを、児童から引き出す。
「⑧段落には何が書いてあると言えばよいか。」	○寒い地方にすむ動物のほうが体格が大きいという例。	・答えられない場合は、２段落の学習を想起させる。
「体格が大きいと何か良いことがあるか。」	△筋肉が発達している。	・「筋肉が発達していると何か良いことがあるか」と尋ね、熱量の生産が多くなることを引き出す。
	○熱量の生産が多くなる。	・「体格が大きいとどうして熱量の生産が多くなるのか」と尋ね、筋肉が発達していることを引き出す。
	○寒地の生活に適している。	・「どうして適しているのか」と尋ね、熱量の生産が多くなることや、筋肉が発達していることを引き出す。
「熱量を多く生産したほうが良いのは、寒い地方とあたたかい地方のどちらか。」	○寒い地方。	
「それはなぜか。」	○体温を一定にたもつためには、熱がたくさん必要だから。 ○寒い地方は、熱がたくさんうばわれるので多くの熱が必	・寒い地方の生活に多くの熱が必要なわけを、児童なりに考えられたら良しとする。

「体格が大きいと熱量の生産が多くなるから、何なのか。」 「⑨段落には何が書いてあると言えばよいか。」	要だから。 〇寒い地方で生活するのに適している。 〇寒い地方にすむ動物のほうが体格が大きい理由。	
５　本時のまとめをする。 「動物の体格と気候との関係は、どうだったか。」	〇同じ種類の中では、寒い地方にすむ動物のほうが体格は大きい。	・短冊黒板②を示し、考えさせる。 ・時間的に余裕があれば、感想などを聞くようにする。

※１名の児童は、体験交流学習中のため不在。